

〔旧約聖書〕サムエル記・上16章1-13節 a、〔新約聖書〕マタイによる福音書3章13-17節
〔讃美歌〕(21) 67
〔説教〕『神の子の献身』

宮崎中部教会の皆様、おはようございます。本日説教を担当させていただき、福岡南教会の浅香と申します。現在は隣の市にある、前原教会の代務も担当しています（九州連合長老会に所属の教会です）。皆様のところに交換講壇で伺ったのは、今から何年前のことだったでしょうか。乾先生が来られる前、いえ、浅場先生ご夫妻がおられる時のことだとしたら、もう十年近く前になります。本当はそちらに伺い、皆様の前に立ってお話しできたらと思いましたが、今回は説教原稿を送るよう依頼されました。皆様のところに伺いたいと思ったのは、わたしが人前で話すことを得意としているからではありません。宮崎観光をしたいからでもありません。そうでなく、御子が甦られたと伝えられている朝―“主の日”の話、“福音”を信じている者たちと共に過ごす時間がこの上なく素晴らしいと思えるからです。本日は短いものになりますが、説教の原稿を長老に読んでいただきます。ですが説教よりも“手紙”かもしれません。そちらの方が自然な気がするのです。どのような形であったとしても、伝える者も聴く者も共に、主の御言葉の豊かな恵みを味わうことができますように。

本日皆様と読み（聴き）進めて行く箇所は、旧約聖書はサムエル記、そして新約聖書はマタイによる福音書3章13節以下です。洗礼者のヨハネが登場します。ヨルダン川でユダヤの民に洗礼を授けていると、ファリサイ派、サドカイ派の人たちもやって来たとあります。それも「大勢」です。彼らはしかしヨハネに厳しく批判されます。ヨハネはこう言い放ちました。

「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。」

歴史に“たら・れば”はないとよく言われますが、わたしは思わず想像してしまいました。ヨハネがこのとき、もし、ファリサイ派やサドカイ派の人たちを自分の弟子にしていたら、と。彼らもイエス様の弟子になっていたのではないか、などと。余計な考えが頭に浮かんだのですが、彼らにはヨハネの言葉（注意、忠告、勧め）を受け入れることができなかったのでしょうか。ヨハネの弟子にならなかった、なることができませんでした。「蝮」（蛇）が「占い師」の意味で言われたのであれば、彼らは黙って引き下がってしまうべきではなかったのです。教師は弟子の奮起を促すため、時たまキツイ言葉を使います。多くは頑なさを打ち砕くために。わたしたちも覚えておくようにしましょう。真理の教師は言葉だけでなく、実際に重荷を負わせることもあると。使徒もこのように言っています。

「互いに重荷を担いなさい。

そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。」

(ガラテヤ6章2節)。

ヨハネは自分だけで「天の国」に仕えていると思っていませんでした。自分だけの力と働きで世界を変えようとは、露ほども考えていませんでした。ヨハネは、自分の「後から来る方」がおられること、その方がどういう方であるか、そしてその方はどんなことをしてくださるか、をよく知っていました。ヨハネはイエス様が「聖霊と火で～洗礼をお授けにな」り、「手に箕をもって、脱穀場を隅々まできれいに」し、「殻を消えることのない火で焼き払われる」のだと伝えました。ファリサイ派の人たちはこの言葉に怖くなり（ヨハネとイエス様の）弟子になろうとはしなかったのかもしれませんが。わたしたちだって同じように怖くなるでしょう。「終わりの日」にはすべてのことが明らかにされてしまうからです。けれども「麦を集めて倉に入れ」る農夫は、自分が蒔いた「良い麦の種」を、悪い者が「真ん中」に蒔いて行った「毒麦の種」から取り出すためにそうします。いつでも、どこでも行われる「敵の仕業」は、主人の財産を奪い取ってしまうほどには成功しないのです。

だからでしょう、「ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て」も少しも心を騒がせません。「大勢」。何人だったかは分かりませんが、ユダヤの社会の大多数を決めてしまえるほどたくさんだったかもしれません。しかしそれを気にかけず、何事もなかったかのように平然と、自分の「後から来られる方」のこと、それのみを伝え続けました。マタイもルカも何の誇張もなく書いているため、ほとんど人が読み飛ばしてしまう箇所だと思います。わたしもそうでした。特別深い意味もないのかもしれませんが。ですが注意されたように聞こえました。

わたしは「大勢」の受洗志願者を見たことがありません。礼拝の中で洗礼（式）が執り行われ、新しい教会員が誕生する光景も十年以上見ていません。毎月の長老会で報告される「強勢・受洗者」の欄はずっとゼロのままです。託されたことに集中しようと努めていますが、気にならないといえばウソになります。いえ、とても気になります。毎年「大勢」の人が「聞いて信じる者」になってほしいし、そういう人たちと礼拝を守って行きたいといつも願っています。今年から他の教会に行く機会が増えたので、余計気になってきたのかもしれませんが。ところがヨハネはだれが、どれくらいの数の者が悔い改めにやって来たとしても、イエス様のことしか見えていませんでした。「わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる」。「後」を「未来」「将来」としてもよいと思います。ヨハネは、イエス様が自分の将来を照らしてくださると信じていました。

本日読まれたところ、はじまりの13節にある「そのとき」も、ヨハネがイエス様のことを正しく、そしてはっきりと知り、伝えた直後のことでした。わたしたちが手にしている聖書では、〈イエス、洗礼を授ける〉という小見出しが入るためか、行が少し空いてしまっています。そのせいで分かり難くなっているのかもしれませんが、前のところから続けて読んでよいのです。つまり、ヨハネが「殻を消えることのない火で焼き尽くされる」と言い終えた「そのとき、イエス（様）が、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた」。上流にあった水が一気に下に流れて来たように。ギリシャ語の原典では、「トーテ」という四文字たらずの小さい語で表されます。意味は「その時」とか「その頃」。難しい意味はありませんが、辞書には興味深いコメントが添えてありました。〈マタイはユダヤ人であったので、過去と未来、現在の区別をはっきりとはつけない〉というものです。わたしも神学校でヘブライ語か旧約聖書神学の時間、どちらかのときに聞いた覚えがあります。ユダヤ人は西洋人のように時間を区切っては考えないと。ヘブライ語にあるのは〈未来〉か〈過去〉だけで、〈今〉はつねにどちらかに関わるもの—というのです。時間の流れも今から将来に向かっていくのではなく、反対に将来から今に向けて時間が流れて来ると考えるのだと。込み入ったことを言ってしまったようで申し訳ないのですが、その学者の言うように、もしマタイのユダヤ人的な考えが「トーテ」（その時）に込められていたとするなら、マタイは、イエス様の働きをしっかりと見つめる者たちを励ましているように思えるのです。

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です。」

（ヘブライ人への手紙13章8節）

「主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。」

（フィリピの信徒への手紙4章5、6節）

しかし、わたしたちもイエス様が洗礼を受けに来られるのを見たら、やはりヨハネと同じように「思いとどませようと」するでしょう。ヨハネとまったく同じことを言うはずですが。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」。

以前、洗礼という儀式に深い疑いを持つ、ある教師と語り合う機会がありました。彼とは年も近く、まだ若かったので色々なところに出かけたりもしました（今から二十年近く前の話です）。話を聞くと、彼が洗礼に疑問を持つのは、洗礼を受けた人間も罪を犯すからだ。なんでも昔クリスチャンの振る舞いはずいぶん躓いた経験があったようなのです。そして「ペトロもヤコブも弟子はイエス様から洗礼を受けていない」と、聖書についても話すのです。わたしは彼が経験した躓きには共感できましたが、聖書の話の部分だけは、釈然としませんでした。ぶ然となって口論にもなりました。ヨハネの言葉が思い出されたのです。「あなたが、わたしのところへ来られたのですか」。

皆様は先週の礼拝で聖餐に与かったと思います。宮崎中部では会衆は前に出て、牧師からパンとぶどう酒をいただくのでしょうか。それともパンとぶどう酒の入った器が運ばれてくるのでしょうか。おそらく皆様は椅子に座ったままでしょう。座ったままパンとぶどう酒に手を伸ばします。わたしも南教会の者たちがそうするのを先週見ました。しかし今、わたしは自分でパンとぶどう酒を皆のところに運んで行きたいと考えています。皆に考え直してもらいたいです。「あなたが、わたしのところへ来られたのですか」。このヨハネの驚きがないなら、救い主の誕生を祝ったあの夜の賑やかさは、ただの夢に終わってしまうと心配になります。パンを受ける時は、自身が受けた洗礼のことも思い起すべきです。わたしたちは「流れのほとりに植えられた木」（詩篇1）に呼ばれたのであって、「良い実を結ばない木」からは切り離されたのですから。

イエス様の受洗を「思いとどませようとした」ヨハネは、こう告げられます。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」。マルコムルカも同じように伝えているイエス様の受洗についての話で一つ、マタイでは違っているこの部分を見て説教を終えたいと思います。

「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」

どんな意味があるのかと思います。ここも先の「そのとき」同様、特段注意すべきところでないかもしれませんが、でも、イエス様が言われたのだから、まったく意味がないわけではありません。というのもこれは「正しいこと」一天の父の御心を満たすために生きた、ヨハネに向けて言われた言葉だからです。本日先ず聞いた旧約聖書、サムエル記の話を振り返ってみましょう。サムエルは不安でいっぱいでした。「サウルが自分を殺そうとしていた」からです。そこで主に告げられた通り、サウルの代りになる新しい王を探すためエッサイの家にてかけます。ベツレヘムの住民も恐れています。預言者サムエルだからといってもろ手を挙げて迎えてくれる者は、もういません。この預言者は恐れに取りつかれていました。それでもエッサイの家に入ると、長男のエリアブは希望を持ってそうな外見をしていました。サムエルは「その人だ」と思い、油を注いで王にしようと思いました。消えかけた希望の明かりが再び灯るのを内に感じたでしょう。ところが神さまは「違う」と言われるので次男を呼びました。そして次男も違うので三男。三男もダメでその次は四男…三男以降は名前も記されていないのは、萎んで行ったサムエルの期待のようでもあります。そして最後に見せられたダビデは「血色が良く、目は美しく、姿も立派」な若者でした。これは昔、旧約の世界・時代では「弱い男」を意味していたといえます。ダビデは本来なら王や将軍に選ばれなかった男だということです。サムエルの心もその考えに影響を受けていたと思います。サムエルの弱った心は御心を見つける力、視力を失っていたのですが、「神は心によって見る」と告げられ、最後のところで正しい者を選ぶことができました。これと「正しいことをすべて行うのは、我々に…」がどう関係するのか—わたしは神様がサム

エルにされたのと同じことを、今度はイエス様がしてくださるからだと思います。イエス様はヨハネと共に「目に映ることではなく、心によって見」る。「目」に映ったものは、光のない夜になると消えてしまいますが、「心」は夜も昼も関係ありません。「正しいことをすべて」御子がしてくださるのであれば。

わたしたちの聖書、新共同訳聖書では読み仮名が「バプテスマ」となっていました。以前の口語訳聖書は逆で「洗礼」とあるところ自体が「バプテスマ」となっていました。カタカナで表される専門用語の中身が見えるようになったのであれば、それはよい試みだったでしょう。でも、もっと見えるようになって行きたいと思います。バプテスマ（洗礼）は、ただ一度だけ受けるものとされていますが、一度だけ受けたこの“道”の話を、年ごとに振り返って行きたいと思います。幾度も思い返す必要のある恵みだからです。詩編にもこうありました。

「あなたの道は海の中にあり

あなたの通られる道は大水の中にある（中略）あなたはモーセとアロンの手をとおして羊の群れのように御自分の民を導かれました。」（詩編77）。

羊は自分では水の中に入りません。羊飼いが群れを向こう岸に渡らせようと思ったとき、そのときにだけ水の中に入り川を渡ります。わたしたちが洗礼を受け、教会に迎え入れられた時も、羊飼いが先ずそう考えておられたのだと思います。正しいことがすべてになるよう行われたのです。お祈りします。

天の父なる神さま、本日は宮崎中部教会の皆とみ言葉を聞くことができました。けれどもわたしは自分で何をし、何を言っているのか分かっていない愚か者ですので、皆は混乱してしまうだけであったかもしれせん。み言葉が、マタイの伝える御子の話が、とてつもなく大きく、数えきれない恵みを宿していることを伝え、分かち合い、喜び合いたかったのですが、上手く行かなかったかもしれせん。けれども「正しいことをすべて行う」御子イエスは、信仰の灯をこれからも守ってくださいます。サムエルは恐れにひどく取りつかれたとき、「悩みの内にあなたを呼んだ」ので答えていただきました。わたしたちが悩むのも本当はよいことであるとしたら、わたしたちの罪を知り、共に水の中を通ってくださいました御子によって勇気を出すことができますように。あなたの憐れみと慈しみの業すべてが、すべてのもの・こと・人に満ちて行きますように。

主の御名によって祈ります。アーメン。